研究の窓

心のはたらきを、脳波から探る。



心理学部
心理学科
教授

加藤公子

【学　歴】
2000年3月　愛知淑徳大学文学部コミュニケーション学科 卒業
2002年3月　愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科
人間コミュニケーション専攻博士前期課程 修了
2005年3月　愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科心理学専攻
博士後期課程単位取得 満期退学
2010年9月　博士（心理学）取得

【職　歴】
2009年4月　国立長寿医療センター研究所長寿脳科学研究部 流動研究員
2013年4月　愛知淑徳大学心理学部心理学科 講師
2016年4月　愛知淑徳大学心理学部心理学科 准教授
2023年4月　愛知淑徳大学心理学部心理学科 教授（現在に至る）

学生時代に認知心理学への興味を深め、脳での情報処理に関する研究を重ねてきた加藤先生。現在は自己優先性について脳波から探り、目に見えない心のはたらきと向き合っています。「『なぜ？』という疑問をデータから解き明かすことのおもしろさを伝え、学生たちの多角的な視点や論理的な思考力を養いたい」と語り、授業やゼミでの指導にも力を注いでいます。

心理学が面白いと明確に思ったのは、大学2年生の時です。動物の実際の大きさを判断する課題において、大きく描かれたネズミと小さく描かれたゾウを比べる場合（正解はゾウ）と、小さく描かれたネズミと大きく描かれたゾウを比べる場合（正解はゾウ）では、前者で判断にかかる時間（反応時間）が長くなるという現象について学びました。見えている情報と記憶にある知識とが不一致であると、認知的な葛藤が生じ、葛藤を解消する時間の分だけ反応時間が延長するのです。「葛藤」という心の状態が「反応時間」という数字で表されることに興味を持ちました。その後、葛藤が起こる2つの情報を脳の左半球と右半球に別々に入力したらどうなるか、という疑問をもって卒業研究を進めました。私の研究活動はここからスタートしたのです。

大学院へ進学して以降は、反応出力以前の脳活動を記録するための知識や技術を身につけました。現在も脳での情報処理に対する興味は増すばかりです。脳への興味は解剖学的な意味ではありません。脳での情報処理方略には、人が心地よく生きるための心のはたらきが隠れていると思うからです。

心理学部で私が伝えているのは、反応時間や脳の電気活動を通して、心のはたらきを目に見える形で表す方法です。学生には、主観でものを見るのではなく、データを基に客観的に考察していく面白さを伝えていきたいと思っています。

加藤先生の主要論文

- 「Event-related potential evidence for memory prioritization modulated by social labels.」（共著）　NeuroReport　Vol. 37　547頁－552頁　2026年7月
- 「Self-relevance dominates memory, whereas partner-relevance depends on retrieval goals: evidence from event-related potentials.」（共著）　Consciousness and Cognition　104074　2026年6月
- 「共行為場面における自己関連刺激処理－事象関連電位による検討－」（共著）　心理学研究　95巻　11頁－21頁　2024年4月

